

人と生きものに優しい農業

原 耕造 Written by Kozo Hara

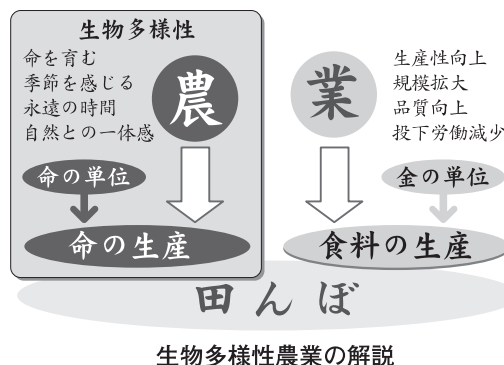
10年前から産直交流事業の一環として田んぼの生きもの調査活動を始め、生物多様性農業の表現として「人と生きものに優しい農業」という言葉を使った。この言葉に対して各グループから多様な反応があった。自然環境系の人には「環境に優しい」という概念と同じで使い古された言葉で新鮮さが無い。営農指導系の人には「環境保全型農業」とは異なる概念でいいと思うがイメージが湧かない。産直事業系の人には「食の安全性」との関係がよく分からない。このように生物多様性農業という概念を確立できないまま、生きもの調査の輪だけが広まっていった。

従来の水田評価は、その稲作収量の生産性や機械化導入の利便性、用排水の利便性等で語られてきた。それは無理のないことで、従来は湿地であったところを中心に水田開発が行われ、その湿地をどのように克服するかが稲作にとって最大の課題であったからだ。稲作の労働生産性は機械化一貫体系によって頂点に達し、更に構造改善事業によって湿地の克服がなされてきた。その間、水田の生きものたちは見向きもされず、その結果、渡り鳥は居場所を奪われ、コウノトリやトキは絶滅に追いやられてしまった。人類にとって飢えからの解放は有史以来の課題であり、日本の近代農業はその課題を克服したかのようであった。しかし、克服の代償は田んぼの生きものたちであり、日本人は飢えから解放されたが、田んぼの生きものたちは更に水田転作という水田から水がなくなることへの過酷な対応を迫られている。私たちの食卓が、このような歴史の積み重ねのうえに成り立っていることは誰も認識していない。

私たちは新たな水田評価の手法として田んぼの生きもの調査活動を続け、その評価手法の開発を目指してきたが、何かがおかしいことに気がついた。田んぼには害虫も益虫もいるが「ただの虫」もいる。田んぼの生きもの種類と数量で田んぼの評価をすること自体に問題があるのではないか。水田を人間が評価するのではなく、水田の生きもの存在そのものを認めることが「生物多様性の本質」、人と生きものに優しいことではないのか。

人類は産業革命以降、物質的に豊かで便利な生活を追求することが幸福につながるとの思いで、人間中心の価値観を優先してきた。その結果、現在の地球環境問題を引き起こし、地球温暖化と生物多様性減少という課題を地球から突きつけられた。今日の地球環境問題の処方箋は、人間の価値観を変えることではないか。

田んぼの生きもの調査をしていると素足の裏から新たな感覚が伝わり、水面に目を近づけて観察していると今まで見えなかったものが見えてくる。暑い夏の日には、調査の途中で涼しい風が襟元を通り過ぎてゆき、トンボやツバメを追いかけてゆくと向こうの空の白い雲が目に入る。蟬の声に耳を傾けていると子どもたちの興奮した声で我に返る。実はこんなことが人間の幸せであることに早く気付かなければならない。CEL



害虫	益虫	ただの虫
ウンカ カメムシ ゾウムシ	トンボ カエル クモ カマキリ	ミジンコ イトミミズ ユスリカ ゲンゴロウ アメンボ
ベジタリアン	肉食性	
動かない	よく動く	

相互扶助をしている田んぼの生きもの
(人間の視点だけで見ていないか)

原 耕造 (はら・こうぞう)

特定非営利活動法人生物多様性農業支援センター(略称BASC)理事長。1949年東京都生まれ。75年全農に入会し、SR推進事務局などを経て、2006年より現職。「田んぼ市民運動」を展開し、環境保全型農業を推進。全農と生協が進めてきた「田んぼの生きもの調査」プロジェクトの代表なども歴任。主な著書は、『環境保全型農業の課題と展望』(共著、大日本農会)、『安心を届ける食品のトレーサビリティ』(共著、サイエンスフォーラム)、『水田再生』(共著、家の光協会)など。